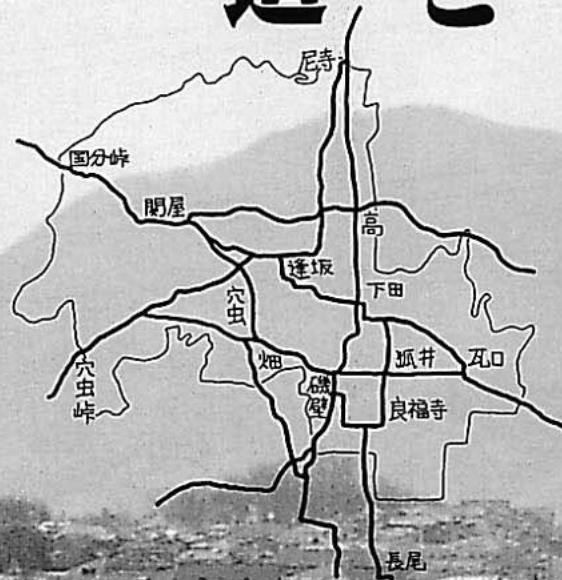


特集

香芝市の道を巡って

旧街道と

現代の道



香芝市は交通の要衝にあります。古代から大阪と奈良を結ぶ重要なルートが通っていました。二上山の北麓の峠を越えてくる古代からの道は、竹内街道とともに仏教をはじめさまざまな文化を人にも運びました。時代が下っても龍田、法隆寺をはじめ初瀬、伊勢、富麻、吉野、高野山などの社寺詣での道として人びとが往来し、また産業道路としても多くの人が利用し恩恵を受けてきました。

現代では西名阪自動車道や国道165号、168号と重要な道が香芝市内を縦横断しています。さらには網の目のように巡らされた県道や市道が、わたしたちの生活道路として利用されています。

もちろん、現在ではかつての街道はそのままの姿では残ってはいません。時代とともに道は使われることによって大きくなったり、また廃れてしまったりしています。こうした旧街道の面影を探し、また人々の往来の姿を求めて、香芝市の道を巡ってみました。





関屋はかつて関所が置かれたともいわれ、また宿場町として栄えた集落で、その面影がどこどなく街全体に残っています。

道があるから
人が往来するのではなく、
必要だから
道はできた。

長尾街道 人々の心を支えた道

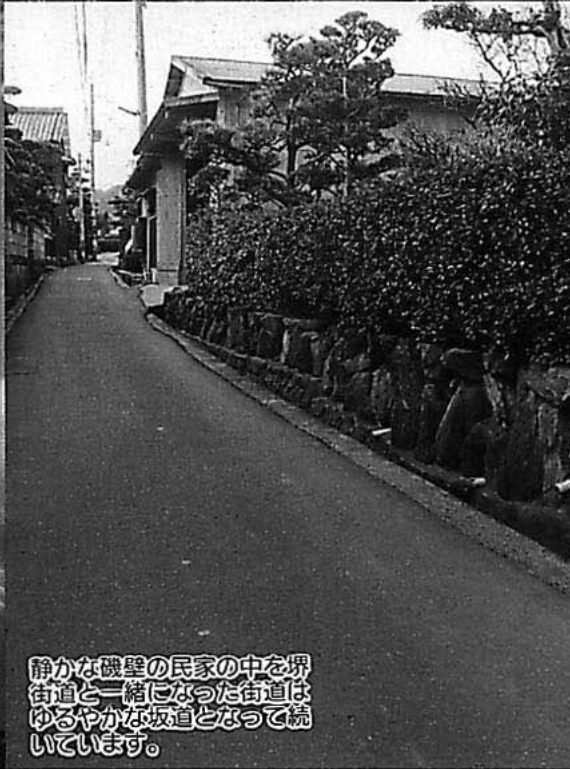
長尾街道は下市街道とも呼ばれ、河内国分から国分峠を越えて、関屋・穴虫・畑・磯壁を経て富麻町・新庄町に至り、そこからさらに南へと続く高野街道が分岐して五条方面へ向かっています。この街道は大阪、河内から大塚山、壺坂寺、富麻寺への参詣の道とし



川沿いのかつての街道も今は子供たちが楽しむに歩く道となっています。



畑の集落にある新池の堤防には、大窪山常夜燈があり、そこには「南大窪山 たんぼ」と刻まれています。



静かな磯壁の民家の中を堺街道と一緒になった街道はゆるやかな坂道となって続いています。

て、また吉野山への遊覧の道としておいに利用されたといえます。

現在の関屋住宅街の北側の山地から下りて来た街道は、関屋の集落から東へと向かっていました。川沿いの三差路には、比較的新しい道標があります。これは楠正成の身替わりになったと伝える千手観音立像を本尊とする観音寺への道しるべです。また、観音寺近くの泉境には、田尻の道が開削されたころの府県境を示す石碑が立っています。トラックやバスが行き交う国道165号と対比するように、今はもう余り使われることのない静かな山道がうねるように山の向こうへ消えているのが、印象的でした。

その地名からもうかがえるように、関屋にはかつて関所が設けられていたといえます。そして、江戸時代の中頃からは旅籠などが立ち並ぶ宿場町として発展しました。とくに明治になって田尻の新道が開通してからは、車馬の往来もひんぱんとなって穴虫とともになり栄えたと伝えられています。

その名残りでしょうか、関屋の集落は道沿いに続いています。古くからある家が立ち並び、道幅の狭い道路は上り坂となっています。坂が下り加減になった所で、北への別れ道があり、ここに道標がありました。「右 たへまはせ いせ 道、左 たつた ほう竜寺 道」とかすかに読めます。ここから田原本街道がはじまっています。

坂を下ると関屋あしびハイツのニュータウンが見え、手前の青果店の側には、屋根に被われた地蔵とそのかたわらに小さな道標が並んでいました。ここが伊勢街道との分岐点で、長尾街道はここから川沿いに穴虫へ向かっています。穴虫から畑へと続いて、そこから堺街道と道を同じくし、また再び磯壁で分かれて長尾で竹内街道へと合流していました。



逢坂の大坂山口神社付近にはかつての街道の面影が残る道が至るところにありました。



下田の旧道沿いの街並みの中、日切地藏の御堂辺りには往時の面影が濃厚に漂っています。



下田の旧道沿いに道を見下るすように立っていた太神宮灯が伊勢へのペクトルを現しているようです。

伊勢街道 香芝最古の道標がある道

長尾街道から分岐した伊勢街道は、逢坂・下田・瓦口・別所を経て、初瀬・伊勢へと通じる参詣道として利用されてきました。

穴虫のはずれにある長尾街道との分岐点には、屋根付きの大きな地藏の側に道標があり、それには六字名号の願文と「かのくににみちびきたまへ はつせ寺、つみはたえまのりののはちす葉」のご詠歌らしい和歌とともに「川よりみぎ たえまみち、大みちははせみち」と刻まれています。そして何と、この道標は香芝市内で最古のものといわれ、延宝七年（一六七九）に建てられています。

逢坂の大坂山口神社の付近は網の目のように昔の道が張り巡っていますが、至るところで旅人たちの幻影を見るような気分にはさせられました。土地の人から聞いたところによれば、かつて近所に旅人に茶を振る舞った茶所があったそうです。

下田の鹿島神社から東へ続く旧道には、道沿いに家々が並び、街場の風情が感じられます。また道沿いに立っている常夜灯には、太神宮と刻まれていて、伊勢への道を思わせます。日切地藏という大きな地藏堂や弘法井戸の付近など、この下田の旧道の界隈はさながら往時の街道の面影を今に伝えているようです。

伊勢街道は下田で北からの富麻道と交差し、さらに東南へと続いていました。そして瓦口で堺街道と合流して、別所から東へ進み、高田で下街道と交差し、竹内街道に合流して初瀬・伊勢方面へと続いていました。

別所の東、小高い丘の上に小さな地藏堂がありました。二上山がやさしい山姿を見せて



道標の文字を見ると、その向こうに長尾街道の道筋が浮かび上がるように見えます。

いる、見晴らしの良い場所です。この辺りが奈良道との分岐点であったといわれています。

田原本街道

荷車や人が往還した道

田原本街道は大阪・河内から中和地方へ通じる主要街道の一つでした。関屋で長尾街道と分かれ、畑之浦・高を通り、上牧町・広陵町を経て田原本へ至っていて、多数の荷車が毎日往来していたといわれています。

関屋の集落を抜けると、東へと続く長尾街道との分岐点には道標があります。道標は家の角にぼつんと立ち、その向こうには池端の木の傍らに小さな地藏堂がありました。この下の池に沿って道は東へと向かっていたようです。道はゆるやかな丘をぬうようにしてひたすら東へと向かい、やがて畑之浦辺りで、北からのびてきた太子道と交差していました。そして現在の国道168号を横切ってさらに東へ進み、今度は南を指す當麻道と交差していました。この交差点に「右 大坂 さかい すぐ たへま、左 はしを すぐ ほりつじ」という文字が刻まれている道標があります。この付近では道はかなり狭くなり、周囲は家々が立ち並んでいます。

旧街道らしい道は、高の集落の軒先をかすめるように東へと続いています。角を曲がると、民家が途切れ、道は葛下川に突き当たって消えていました。昔はそこに橋がかかっていた、人々はそこを往来していたと土地の人からうかがいました。

さらに東へと続いて、田原本街道は南上牧で箸尾街道と分岐していたといえます。



穴虫の峠は古代からの道として知られ、今も峠には地蔵さんが自動車の往來を見守っていました。



磯壁の集落近くにあった地蔵さんと道標は、杉の木の根元、川と民家に囲まれるようになりました。

畑の集落東にあった道標には二上山への登山道も記されていました。

堺街道 古代からの峠越えの道

二上山の北の山麓を通る堺街道は、大坂、河内と大和を結ぶ重要な街道として利用されてきました。堺から河内を経て、太子町春日で竹内街道と交差し、穴虫峠を越え大和側に入った穴虫で太子道と分岐して、畑、磯壁、狐井を通り、瓦口で伊勢街道と合流していました。穴虫の峠からしばらくは太子道と、また畑から磯壁までは長尾街道と同じ道筋をとっていたといえます。

穴虫の峠はゆるやかな坂道といった、低く



いくつかの道が
一つになり、
またそこから新たな道が
分かれていく。



二上山に向かい合うように立っていた地蔵さんが、この道をたどる人々をずっと見守ってきたように思えます。

開けた明るい峠です。道路の下を近鉄南大阪線のトンネルが通っています。道路を見下ろす位置には、竝に包まれるようにして峠の地蔵がありました。この峠を往来する旅人たちが、来た道を振り返りながら、上り下りしていた時代が、この地蔵さんを見ているとイメージされてきます。

どんする釜を左手にして、道は谷間を通り、やがて自動車の往来激しい国道165線の中に消えています。再び畑の付近から街道は姿を現して、長尾街道と一緒に、右手後方に二上山を仰ぐようにして、ゆるやかに平野部へと下っています。

畑の集落の東端に、三差路となった辺りにコンクリートで身動きもならないといった様子の道標がありました。右 大坂 左 二上山」という文字がくっきりと浮き上がって見えました。多分、左の道が二上山への登山道だったのでしよう。

街道は田畑の中をうねり曲がり、山裾を東南へと続いています。途中、地蔵さんがイチヨウの大木に見守られるように道に向かって立っていました。この地蔵さんもきつと大勢の旅人たちの姿を見て来たことでしょう。

やがて街道は磯壁の家並みの中をたどり、小さな川の傍でお地蔵さんと道標とに出会います。道標からは文字を読み取ることもできないほどに古びていました。この辺りで長尾街道と分かれ、北のほうからの道や富麻道などと交差してははずです。

さらに、堺街道は国道168号線と交差し、東へと続いています。狐井街道と交差するまで、またしばらくゆるやかな上りとなっています。交差点を過ぎると、杵築神社、福心寺の前を通りますが、この一角は静かな風情が感じられ、街道の名残をとどめているようです。

太子道 竹内街道へ続いていた道

太子道は王寺方面から河内・堺に通じる道路で、王寺町畠田で富麻道と分岐し、尼寺、志都美と南下して畑之浦南で田原本街道と交差していました。そして今度は逢坂で伊勢街道と交差して西へと向かって、次に長尾街道と交差して穴虫を通り、山裾をほうように西へ続いていました。さらに竹田川を越えて国道165号と交わって、堺街道と道を同じくして穴虫峠を越えて河内に達していました。明治時代以前には荷車が多数往来するような道であったといいますが、今日ではその道跡も分かりづらい場所も多くなっています。

志都美神社の参道横の十字路には小さな地藏さんがあり、それには「右 たつた、左 大阪 さかい」と刻まれています。また穴虫では長尾街道と交差して、大坂山口神社の近くを通っていましたが、この辺りは古来から大坂越えの一つで逢坂とともに重要な交通の要衝であったと伝えられています。

道は小山を回るようにして西へと続いていたらしく、竹田川沿いの田園が広がるのどかな風景の中をたどっています。そして現在の国道165号を横切り、堺街道と一緒にたつて穴虫の峠へと至っています。

国道と穴虫峠の分岐点近くに地藏さんがあり、また大坂越えの石碑が立っています。国道165号大和高田バイパスの合流点が目の前にあり、高架橋の出現や交通量の激しさに地藏さんもびっくりしているのではないかと心配になりました。

穴虫の集落のはずれ、
小山や竹田川のある田
園風景には、いかにも
古代の道が通っていた
ような風情があります。



堺街道との交差点付近には、寺社が立ち並び、往時の街道の面影が色濃く漂っていました。



狐井の集落を抜けて良福寺へと続いていた街道は、人々の暮らしを支えた道でもありました。



道路脇にひっそりとあった道標が、かつての人々の往来を物語っていました。

狐井街道 人々の暮らしを支えた道

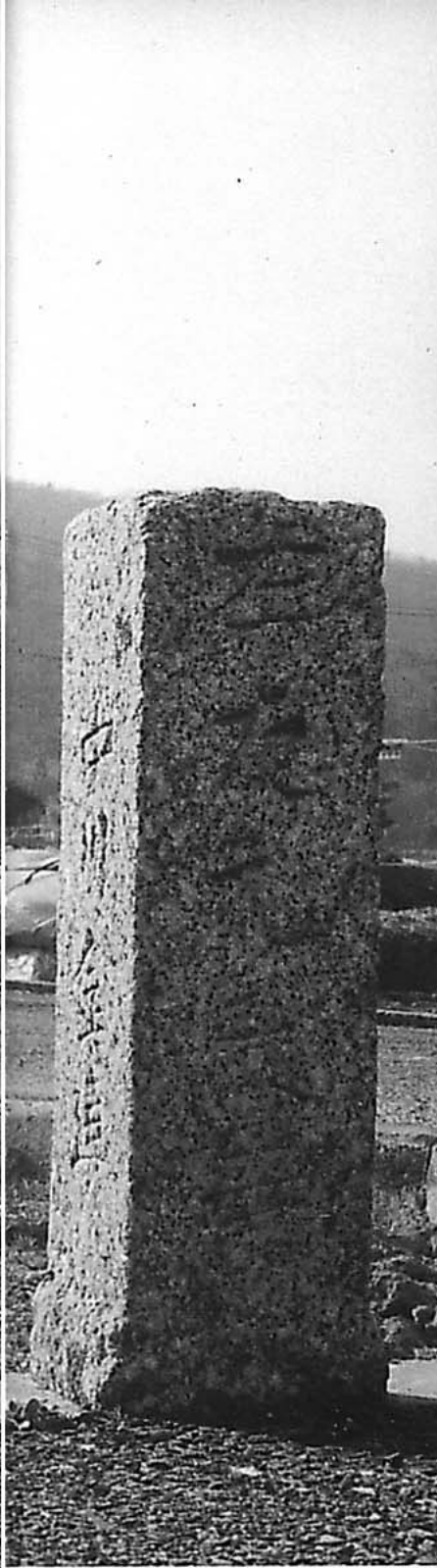
狐井街道は王寺方面から大峰山・吉野・高野山にいたる道で、下田で当麻道と分岐し、狐井を経て良福寺の南で、長尾街道と合流していました。

それは長尾街道と同じように、南の大峰山や高野山、吉野の諸寺に参詣するという多分に宗教的な色彩を帯びた道であったといえるでしょう。

とはいえ、この道は集落と集落を結び、人々が日常的に往来した、いわば生活道路の役割も多かったはず。下田、狐井、良福寺という集落の連絡線としての道、人々の暮らしを支えた街道ではなかったでしょうか。

狐井の集落に東西を横切る道との南東角にポツンと道標がありました。コンクリートの溝や石垣に押されるような体勢で立っている石柱に刻まれた文字は、ほとんど読み取れなくなっており、時代の流れを見るようです。

そこから道は南へと行くにしたがって少し上りになってきます。その頂点に差しかかる所で、西から堺街道が交差しています。かつて、その場所にあったらしい、堺や伊勢、吉野の地名が刻まれた道標は見当たりませんでした。交差点を過ぎると、狐井城山古墳の側を通り、しだいに下って良福寺の集落へと入って行きます。良福寺の街並みはかつての街道沿いに発展した面影をとどめ、ポツクリさんで知られる阿日寺の門前を通り、やがて国道168号線へと消えて行きました。



磯壁の風情ある集落の中をまるで巡るようにして当麻道は続いていたようです。

天保2年の銘がある道標は、室町とした姿で民家の庭先に保存されていました。

地藏堂に面する奥道の先を横切っ
て南へと当麻道は続いていました。

石光寺へのしるべが刻まれた道標は地の傍らに、二上山を望むように立っていました。

当麻道 二上山麓へと誘う道

当麻道は王寺・法隆寺方面から富麻寺・壺坂寺・大釜山への参詣道であり、また南和地方面からの信貴山・法隆寺・達磨寺への参詣道でもありました。
王寺から上中、高、そして下田と南へ下り、下田で大釜山・壺坂寺方面への狐井街道と分

かれ、磯壁を経て石光寺・富麻寺へ至っていました。またそこから南へ続いて、富麻町竹内にて竹内街道に連絡していました。

現在、上中の黒松さんの邸内に当時の道標が保存されています。これは上中の集落の南端の丁字路に道を見下ろすようにして立っていたそうです。石碑の裏側には天保二年（一八三一）の銘があり、黒松家の四代目・喜右衛門直友という人が建立したと刻まれています。道幅を広げるときに障害となったとかで、邸内に保存されるようになったそうですが、高さ一メートルを超える花崗岩で作られた堂々たる道標です。「右 たえま よしの 金剛山 道、左 なら 法里うじ だるま寺 道」という雄渾な筆使いの文字もきわめて鮮明で、彫りも深く、ほれほれとするような道標です。その道標が立っていたという場所へ行ってみましたが、その道幅はおどろくほど狭いものでした。しかしこの道標があった時代はそれよりもまだ狭かったといえますから、昔の道のスケールが想像されます。道は地藏堂の先で奥道上中・下田線を横切り、南へ向かって、高で田原本街道と交差していました。

当麻道は下田から磯壁へと向かい、磯壁の集落を通っていました。それまで下田で伊勢街道、磯壁で長尾街道と交差しています。磯壁の集落の中を落ち着いた民家に囲まれるように道は続いています。

そして磯壁の新池の横を通って、165号大和高田バイパスを横切り、石光寺の門前へ続いていました。新池の側には三本の道標がたっていました。右端に石光寺、真ん中に地藏さんが刻まれているのが読み取れます。背後にはゆるやかに傾斜する畑が続いて、その向こうに二上山が見えます。このどかな風景の中を人々が歩く様子を思い浮かべながら石光寺の石段を上っていました。



通る人、
運ばれるもの、
道は時代とともに
変わってきた。